

琅邪の虎

丸山天寿

Tenju Maruyama

講談





講談社文庫

ろうや
琅邪の虎

丸山天寿

講談社

|著者| 丸山天寿 1954年長崎県生まれ。福岡県立八幡南高校卒業後、陸上自衛隊勤務を経て古書店を開業。ライフワークである邪馬台国研究を進めるうち、自身初の小説となる中国歴史ミステリー『琅邪^{ろうや}の鬼』を着想。2010年、同作品で第44回メフィスト賞を受賞しデビュー。他の著書に『咸陽^{かんよう}の闇』『邯鄲^{かんたん}の誓 始皇帝と戦った者たち』『死美女の誘惑 蓮飯店あやかし事件簿』がある。

ろうや とら
琅邪の虎

まるやまてんじゅ
丸山天寿

© Tenju Maruyama 2014

2014年5月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——凸版印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277843-5

目次

一、	さらう……………	9
二、	おどす……………	28
三、	ひそむ……………	56
四、	はしる……………	71
五、	ころす……………	97
六、	ほえる……………	118
七、	ゆらす……………	149
八、	さそう……………	180
九、	くらう……………	211

十七、	十六、	十五、	十四、	十三、	十二、	十一、	十、
あかす……	くるう……	かかる……	かなう……	たたる……	うめる……	つぶす……	まよう……
431	392	352	330	303	277	258	237



講談社文庫

ろうや
琅邪の虎

丸山天寿

講談社

目次

一、	さらう……………	9
二、	おどす……………	28
三、	ひそむ……………	56
四、	はしる……………	71
五、	ころす……………	97
六、	ほえる……………	118
七、	ゆらす……………	149
八、	さそう……………	180
九、	くらう……………	211

十、まよう……………237

十一、つぶす……………258

十二、うめる……………277

十三、たたる……………303

十四、かなう……………330

十五、かかる……………352

十六、くるう……………392

十七、あかす……………431

琅邪の虎

主な登場人物

徐福^{じよふく}……………巫医^{ふい}。薬学医学の大家。偏屈な老人



希仁^{きじん}……………琅邪^{ろうや}の求盗

残虎^{ざんこ}……………徐福塾の巫医

狂生^{きやうせい}……………徐福の弟子。剣士

桃^{とう}……………狂生の妻。残虎の助手。元舞姫

無心^{むしん}……………徐福の弟子。狂生の兄

幽見^{ゆうけん}……………徐福の弟子。異能の持ち主

安期^{あんき}……………地仙と呼ばれる巫医。方士

陽武^{ようぶ}……………希仁の同僚

蓮^{れん}……………飲み屋の女主人



陳舜^{ちんしゆん}……………琅邪郡の丞^{じやう}(副長官)

林直^{りんちよく}……………琅邪郡の尉官。武人

富去^{ふきよ}……………琅邪郡の主監

李耳^{りじ}.....徐福塾に娘の治療に来ている工人

沈^{ちん}.....李耳の夫人

春^{しゅん}.....沈の娘。大病の治療中



笠遠^{りゆうえん}.....琅邪の儒者。口喧^{やかま}しい老人

孫通^{そんつう}.....咸陽から来た風水博士

子讓^{よじよう}.....風水博士の随行員

根^{こん}.....行商を生業^{なりわい}とする中年婦人。噂好き

孫伯^{そんはく}.....獵師の頭

恵^{けい}.....孫伯の娘

李仲^{りちゆう}.....港灣作業員

清^{せい}.....未亡人

虎牙^{こが}.....捕賊士^{ほぞくし}・賞金稼^がぎ



呉多^{ごた}.....徐福塾の犬

「琅邪」……

……古来より「あやかしの町」と呼ばれた中国大陸の東端・山東半島にある

港町。その海に、目には見えるが決して近付く事のできない浮島が時に現れ、人々は仙薬を飲む「神仙」たちが住む島であると信じていた。

一、さらう

求盗^{きゆうとう}（警察官）の仕事は楽なものだ、と希仁^{きじん}は思う時がある。但し世の中が平和な時は、という枕言葉がつくけれど。

しかし、希仁がこの琅邪^{ろうや}の町の求盗になつてから二十数年、残念だが平和な時期は少なかった。

彼の生まれる数百年前から国全体が大きな戦^{いくさ}をやつていて、何とか戦が収まつたのはほんの数年前の事である。戦国七雄のなかで西方の野蛮国と言われていた秦^{しん}が、他の韓^{かん}、魏^ぎ、趙^{ちよう}、燕^{えん}、斉^{せい}、楚^その国々を全て滅ぼし、形の上で大戦はようやく終結した。

斉の国に属していたこの港町琅邪も秦の支配下に入つたが、どこの国の支配下であ

つても構わない、と希仁は思っている。町が平穩で琅邪の民が安全に暮らせさえすれば、誰が王でも構わないのだ。だが、戦がなくなつたとはいえ、世の中が完全に平和になつたわけではない。滅ぼされた国の王族や武人達は、故国を復興させようと考へ、あちこちで騒ぎを起こす。そんな事は他の所でやってくれ、と希仁は思うがそうはいかない。

つい先頃もこの琅邪で、滅ぼされた斉王室の宝をめぐつて「琅邪の鬼」事件という悲惨な出来事があつた。それは何とか收拾がついたが、あんな事件は二度とお断りだと希仁は思っている。

事件の後始末が終わつてからは、彼にとって比較的に楽な日が続いている。彼は朝陽とともに仕事を始める。まず海岸に行き、青く美しい琅邪の海に、次いで琅邪山の山神に向かつて拝礼し、町の巡回に出るのが彼の日課だ。

この町は鳥が翼を広げたような形をしている。町の中央に海から盛り上がったような琅邪山が聳え、その麓から中腹にかけて官邸と官舎が建ち並んでいる。

中でも特に目に付くのは、秦王（始皇帝）の建設した観光台（琅邪台）だ。琅邪の海を眺めるために建設された観光台とその高樓は赤や黄色のけばけばしい原色に彩ら

れ、神秘的な雰囲気を持つ琅邪山にはそぐわないと人々は言う。

山の東側に古くからの町並が広がっている。中国の東端、東海とうかいに臨むこの町は昔から小さな港町として開けていたのだ。

ところが秦王が琅邪にやって来てからは様相が変わった。異常なほどに琅邪の海を愛した秦王は、琅邪の町に向こう十二年間の免税を施行し、さらに近隣の住民の自由な移住を許可した。そのために琅邪山の西側に新しい町並がどんどん広がりつつある。

希仁の巡回の仕事は以前の倍以上になった。

身の丈八尺たけ（約百八十センチ）を超える希仁が、大剣を下げ厳めしい顔で町を歩くと、一寸ちよつとした喧嘩けんかや諍いさかいはすぐに終結してしまう。

子供が悪戯いたずらをすると母親は「希仁の旦那だんなが来るよ」と叱しかるのだ。子供達は鬼をも睨にらみ返すという恐ろしい形相ぎようそうの希仁の顔を思い出し、すぐに大人しくなる。あの大きな目で睨まれ、髭ひげだらけのいかつい顔で怒鳴どなりつけられたら、と震えあがる。しかし、希仁が悪さをしない者を怒鳴りつけないのを子供達は知っている。

希仁は人を二通りに分ける。身分でも年齢でも貧富でもなく、悪人か善人かで分け

るのだ。悪い奴は容赦なく拳骨げんこつを喰らわせて捕えるが、悪い事さえしなければ、女、子供にはとても優しいから、子供達はよく彼にまわりついていて、希仁も町中のたいていの子供達の名前を知っていて、話相手になったりもする。

その日希仁は、その大股の歩き方を真似て付いてくる数人の子供を従えて、町を巡回していた。

町の西側を巡回し、東側に行く途中に希仁はいつものように徐福塾じよふくじゅくに立ち寄った。

琅邪山の裏側の麓に建っている徐福塾は、正式には「徐福仙薬研究所」というが、人々は単純に「徐福塾」と呼んでいる。

秦王が琅邪の海を愛したと言うのは建前で、彼の本音は琅邪の海上に浮かぶ神仙が住む島にあった。その不思議な島には、不老不死の仙薬を飲んだ仙人が安楽な生活をしているという言い伝えがある。不老不死を願う秦王はその仙薬を手に入れようと、入手を医学薬学の大家、徐福に命じた。

「神仙島に行くもよし、自らの手みずかで作るもよし、とにかく仙薬を手に入れよ」と命じた秦王は、彼に出来る限りの援助を約束した。

それが、町に対する免税であり、近隣住民移住の許可でもあったのだ。